

公益社団法人水戸青年会議所  
2019年度 理事長所信

第67代理事長 前田 拓哉

スローガン

「原点回帰」

基本理念

変革意識のある  
活力ある人財による  
未来への礎となる組織の構築

基本方針

自らが誇れるまちづくり  
夢を描けるひとづくり  
将来を見据えた会員拡大  
未来を照らす歴史編纂  
戦略的な広報発信

新日本の再建は我々青年の仕事である。更めて述べる迄もなく今日の日本の実情は極めて苦難に満ちている。この苦難を打開してゆくため採るべき途は先ず国内経済の充実であり、国際経済との密接なる提携である。その任務の大半を負っている我々青年はあらゆる機会をとらえて互に団結し自らの修養に努めなければならぬと信ずる。

既に欧米各地においては青年会議所が設立せられ、1946年にはこれ等の世界的連絡機関として国際青年会議所さえ設立されている。

我々は、これ等の国際機関のとの連絡は素より、青年の持つ熱と力とを以つて産業経済の実勢を究め、常に認識を新たにしてその責務の達成を期したい。

ここに県下経済の中心地、水戸に在る我々青年はその使命の極めて重大なるを思い同志相寄り水戸青年会議所の設立を企図した次第である。

(昭和28年11月 水戸青年会議所設立趣意書より)

日本で最初の青年会議所ができて約70年。水戸青年会議所は日本で50番目の青年会議所として誕生し、時は移り2019年。「平成」と言いう激動の時代が終焉を迎え、新たな時代の幕開けとなろうという今日、我々青年の行くべき道はどこにあるのか。趣意書からは、現在における社会に対する問題意識と描く未来像はかつての時代とそう大きく変わっていない様に感じる。

ただし、戦後復興から高度経済成長を経て、バブル景気が崩壊し、青年会議所メンバーにとっては物心付いてから今日まで不景気と言われる状況が続いている。日本は経済大国と言われ久しいが、様々な経済指標の中から世界の平均年収で言えば日本は18位とも言われる。つまりは、決して我々は既に豊かな国家・国民ではなく、青年会議所の置かれる状況も好景気に裏打ちされて、右肩上がりでメンバーも増えていった時代とは明らかに異なるのである。ましてや人口減少、少子高齢化は青年会議所の後退に拍車をかけるように思う。

青年会議所として歩むべきは、社会の現況に左右されず一貫して「明るい豊かな社会の実現」に向けた道でなければならない。水戸で青年会議所は産声を上げて67年。時の移り変わりと共に、地域社会からのニーズを的確に捉え、時に水戸市のまちづくりに対し提言をし、あらゆる手段を通じて独自の事業・運動を展開してきた。しかし、青年会議所の認知度という点で言うと、市民からは数ある青年団体のひとつと思われている実情があり、組織として本当に社会的必要性があるのだろうか。時に悩んでしまう時がある。我々の運動は本当に社会のニーズに適合したものであるのか、時に疑問を持たざるを得ない。

だからこそ地域にとって明確なメリットを示し、青年会議所だからできる運動を展開していかなければならない。全国的に見ても会員数も在籍年数も右肩下がりである。それでも地域に存在感を示すにはどうしたかいいか。自分たちの組織にプライドをもちたい。未来のいつか、我々が行ったことが、子や孫に語れる大人でありたい。

## 自らが誇れるまちづくりを

私が2011年に入会して以来、水戸青年会議所のまちづくり事業と言えば、「夜・梅・祭」に代表される市民からも注目度の高いものであった。「一泊型観光都市を目指す」という目標を掲げて、水戸の観光や交流人口拡大という観点から、事業を構築したものである。しかし、これを移管したのち、地域に対して目立った事業を構築できていない現状がある。規模の大きい事業＝良い事業というわけではないが、「夜・梅・祭」の様に、前例を壊し、時代に風穴を開けるような運動を展開したい。

ただし、人口減少・少子高齢化は現実問題であり、社会的影響を及ぼすような我々の運動も一青年会議所のチカラで展開することが困難であると認識している。つまりは行政や他団体の行う事業との共催にも目を向けていきたい。水戸市の財産である「まつり」をうまく利用して、低投資でも高感度の運動展開こそが、今後の青年会議所の運動を占う上で、非常に重要なことである。

## 行政への提言について

五軒小跡地（現水戸芸術館）の有効活用について青年会議所が提言をしたことを知っているメンバーはどれだけいるのだろうか。自らの運動だけではなく、行政のまちづくりに対してアクションを起こすことも青年会議所の役目である。

水戸市が千波湖畔ボーリング場跡地について、用地買収の意向を示した。梅まつりの期間中や水戸観光における観光の玄関口である。千波公園や偕楽園公園に年間を通じて観光客が増やせる活用法を提言し、未来に水戸の遺産として語れるモノを創造したい。

## 夢を描けるひとづくりを

自分に子供ができて、子の将来をふと思う時、子の将来を案じて、未来がよりよく拓かれるようにしてやりたいと思う。だから、未来のまちを創る子供たちに教育を施し、夢を描かせることは大人としての役目なのだと思う。長きにわたって続けてきた交通安全啓蒙活動も、少子高齢化の影響で、対象者が子供から高齢者へとシフトチェンジしつつある。子供への交通安全教育は当然必要なものであるが、社会

的ニーズにも応えるべきである。「ちびっ子広場」は子供のためのものであるならば、高齢者には高齢者の学びの場が必要である。

また、昨年のサッカーワールドカップ、今年の茨城国体、2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催も目前に迫っている。水戸ホーリーホックや茨城ロボッツの活躍も相まって、市民のスポーツに関する関心、興味は高まっていると察する。スポーツは多くを語らずも夢を与え、未来への希望を描かせてくれる。未来に向かって飛躍する子供たちへ、その一助となる機会を提供したい。

### 国際化について

2016年「国際アカデミー」開催を皮切りに2017年台湾・嘉義国際青年商会との姉妹締結を通し、LOMとしても一気に国際化に対する機運が高まり、全国的に見ても都市の国際化やインバウンドへの関心が高い。

しかしながら、一地方都市にとって、インバウンドに対するインフラの整備や、「おもてなし」による外国人受け入れに関する市民への意識喚起は、まだまだと言える。むしろ外国人観光客、ましてや国内観光客すら決して多くない現状がある中で、現状声高に「国際化」を叫ぶことが意味を持つとは到底思えない。

今、水戸青年会議所としてできることは何か。お隣笠間市では、台湾からの誘客促進に向けて台北市内に「台湾交流事務所」を設置した。我々にも嘉義国際青年商会との強い絆がある。我々自身が水戸の魅力を認識することが第一で、市民や子供たちにそれを伝播し、嘉義メンバーにもそれを伝えていくことが国際化への一歩なのではないか。

### 将来を見据えた会員拡大を

かつて200人の隆盛を誇った水戸青年会議所も、現在はその3分の1ほどのメンバー数となった。「会員拡大は青年会議所の永遠の継続事業」であるが、本を正せば、魅力的な組織であれば自然と人が集まるはずである。景気の問題なのか、会費の問題なのか、在籍する人財の問題なのか。青年会議所という組織を客観的に捉え分析すべきである。

少なくとも青年会議所の活動は、直接的な実益というよりは「社会貢献」という色が強い。身銭を切ってまちのために使うことは称賛されるべき姿であるが、実学・実利主義的な経営者が多く、特に価値観の多様性ある現代においては、足が遠のくのも自然だと考えられる。

拡大の成功事例は多々あり、情報公開はされている。そこには他の青年会議所の事例を参考にしてこなかった経緯があるし、現状に甘んじてきたところもある。増加に転じない状況がある以上、そこは素直に学ぶべきであり反省すべきである。若手経営者はこの地域にまだまだいる。彼らを発掘する新たな手法を講じてほしい。

#### アカデミーについて

先にも記した通り会員減少や在籍年数は右肩下がりであり、3年～4年という在籍年数では、青年会議所の少し奥まで踏み入ったところで卒業を迎えるという現状となる。そのような状態でガバナンスを効かせながら組織存続していくことは非常に難しい課題である。正確な情報と青年会議所の楽しさを学ぶことのできるアカデミーの機会が必要である。本年は仮入会メンバーのアカデミーを毎月の例会に見出しながら、彼らが自ら事業を創り上げる体験をし、人のために尽くすことで、奉仕・修練を通じた友情を育む過程を体験できる事業を実施してほしい。

#### 未来を照らす歴史編纂を

70周年まであと3年。されど3年である。どれだけのメンバーが迎える70周年とその先の青年会議所像を描けているだろうか。60周年を迎えるにあたり、当時担当委員会の委員として準備を進めることには並々ならぬ苦労があると知った。青年会議所の歴史の語り部がない今、過去の風化にストップをかけなければならない。

徳川光圀によって編纂された『大日本史』は250年にも渡って編纂が行われたと言われている。「彰往考来」の精神に拠って、過去をあきらかにしてこそ未来を考えるという考え方は、水戸に残されたすばらしい知的財産ではないか。水戸青年会議所のメンバーも過去を振り返り我々の歴史をカタチにすることで、我々の進むべき道も明らかになるのではないかと思う。

## 研修事業について

青年会議所では、特にアカデミーメンバーに対して、青年会議所のルールを学ぶ場として「寺子屋」と称して研修事業が行われてきた。繰り返しにはなるが、短い在籍期間の中で青年会議所について知ってもらうことは、今の青年会議所喫緊の課題であると考え、研修事業の必要性は言わずもがなである。

ただし、必ずしも一から「読み書き」を習う必要はないと感じている。それは、青年会議所の仕組み上、ある程度は実地研修を通して、先輩たちを見ていることで学ぶこともある。かくいう私も青年会議所のルールについて、机上で習った覚えはないからである。だからこそ、研修事業は対象者をアカデミーメンバーに限らず、青年会議所の過去の実績と未来への可能性を描き語れるものでありたい。

高杉晋作や伊藤博文等、幕末から明治の激動の時代を切り拓いた偉人達を輩出した「松下村塾」で松陰は何を教えたのか。倫理学、地理学、歴史、経済、芸術はさることながら、「士規七則」という武士としてあるべき姿を教えたという。そこには七条の言葉が書かれていたというが、要約すると「志をもて、良き友とそのために行動せよ、本を読め」ということである。青年会議所も「学び、志をもって、行動を起こし、友を得る」組織だと思ふ。それを体現する学び舎となって欲しい。

## 戦略的な広報発信を

会員拡大にも通じる部分ではあるが、組織の広報戦略というものをこれまで考えてこなかった。どうすれば、青年会議所の魅力が効果的に伝わるのか。SNS等を通じた発信は果たしてどれだけの効果をもたらしたのか。極論を言えば青年会議所の運動を評価しているのは、自分たちと行政の一部ぐらいではないだろうか。水戸青年会議所の認知度は水戸市でどれくらいあるのだろうか。

我々が水戸青年会議所だと知ってもらい、我々は何のために運動や事業を通して、地域社会に貢献しているかを戦略的に発信するには、考え方そのものを変えていかねばならない。手法は幾多あれど、時に人のチカラを借りてもいい。アイデアをカタチにして、年間を通じた一方的でない丁寧な広報発信を心掛けていきたい。

## 公益社団法人について

2014年に法人格を移行してから、早5年が経つ。ようやく公益社団法人としてのルールは認識できるようになったが、組織としてそれを管理し、運営していく能力は、まだ県のサポートなしにはできていないというのが現状だろう。公益審査会議が設置されて4年目になるが、その位置付けに曖昧さがあると言える。公益社団法人としての知識と認識をメンバーに拡散させ、組織を存続させることも大切である。その一方で一般社団化や諸々の手続きを外部委託するという選択肢も無きにしもあらずである。今後の組織を見据え、ある種自分たちの負担軽減も視野に入れた水戸青年会議所の立ち位置というものを確立しよう。

青年会議所は不思議なところである。

お金と時間を使い、奉仕・修練に耐えた者が

たくさんの友情を勝ち得るというロジックがある。

価値観の多様性がある世の中において、

いつまでもバブル期の残党と価値が渦巻き、

政治が地域の運動の邪魔をする。

本来、我々は時代を変えなければならない青年の集まりである。

自由な変革者は時に世の中から嫌われる。

周りから無理だとか、困難だとか、限界だと言われ続けたとしても、

いつの日も挑戦や夢という言葉は、JAYCEEの心根でチカラとなる。

だからこそ自己成長のために、大きな旗印を掲げ、

今、自分と組織の限界を打ち破れ。

青年よ、いざ変革者たれ。